

ルカによる福音書2章「へりくだる神」

1A みどりごととして 1-21

1B 従属 — 人間の制度 1-7

2B 証言 — 羊飼いの 8-20

1C 御使いの現われ 8-14

2C 応答 15-20

3B 移行 — 御使いによる名 21

2A 幼子として 22-40

1B 従属 — モーセの律法 22-24

2B 証言 — 神の人 25-38

1C 聖霊に満たされた人 25-35

2C 女預言者 36-38

3B 移行 — 神の恵みによる成長 39-40

3A 少年として 41-52

1B 従属 — 祭りの慣習 41-45

2B 証言 — イエスご自身 46-50

3B 移行 — 神と人の愛による成長 51-52

本文

ルカの福音書 2 章を開いてください。ここでの主題は、「へりくだる神」です。前回、私たちは、バプテスマのヨハネの誕生の記事を読みました。そこでは、奇跡的な事が起こりました。妻のエリサベツも祭司のザカリヤも、同じヨハネという名前を子どもにつけて、ザカリヤは、名づけた途端、口が開けて、神を賛美しました。このことは、ユダヤの山地全体に広まり、人々は、このヨハネのことを心に留めました。そして、ヨハネは、成長してから荒野に住み、公の活動をする準備をしました。神の預言者として、人々の期待と気運が高まっています。その一方、イエスの誕生の記事を読むと、それとは正反対の出来事を読みます。イエスは、人々の期待にはそぐわないような、誕生と成長を遂げられました。それでは、さっそく本文を読んでいきましょう。

1A みどりごととして 1-21

1B 従属 — 人間の制度 1-7

1 そのころ、全世界の住民登録をせよという勅令が、皇帝アウグストから出た。そこは、クレニオがシリアの総督であったときの最初の住民登録であった。

ルカは、福音書を書き始めた時と同じように、世界史による舞台設定をしています。皇帝アウグストは、紀元前 27 年から紀元 14 年までローマを治めていました。ローマが共和政から帝国にな

ったその初代皇帝であります。そして、クレニオは今まで、紀元後 7 年から 9 年までの総督であるとされていましたが、最近の歴史的文献によりますと、それは 2 回目の統治であったということがわかりました。紀元前にも総督になった時があったのです。

ルカがこの福音書を、テオピロという、おそらくはローマの高官であった人書いていることを思い出してください。ローマの事情をよく知っている人に対して書いています。したがって、このようなローマの政治状況と歴史を正確に書き記す必要性があり、そして何よりも、イエス・キリストがローマを超えるところの驚くべき存在であることを意識して書いています。

この住民登録が「全世界」と強調しています。ローマは当時知られた世界を制覇する帝国でありましたし、それはまたその後の全世界をも見据えた表現であるということです。さらにアウグストは「皇帝」です。彼は、世界を武力によって平定し、「パックス・ローマナ」と呼ばれるローマによる、力による平和秩序を確立しました。そこで、彼は世界に平和をもたらしたということで、「主」と呼ばれ、「救い主」とも呼ばれるようになりました。さらに、このようなすばらしい世界がやって来た、これが良き訪れ、福音だともされてきたのです。

しかし旧約聖書は、ユダヤ人がバビロンによって捕え移された以降、終わりの日に至るまでの幻をダニエル書によって示しています。ネブカデネザル王が見た夢は人の像であり、頭は金、胸と両腕は銀、腹は青銅、そして両脚は鉄で、足の部分は一部は鉄、一部は粘土が混じり合っていた夢でした。そこに、人の手に抛らないで切り出された石が、鉄と粘土の混じり合っている足のところに当たり、像全体が粉々に打ち砕かれ、その石が大きな山となります。これは世界帝国の幻でした。金の頭はバビロン、次の銀の胸と両腕はメディア・ペルシヤ、青銅の腹はギリシヤ、そして両脚はローマです。そのローマが分裂し、緩やかなつながりを持っているところに石なるキリストが来られて、人の帝国はすべて粉碎し、永遠の神の国が到来するという夢でした。

そして、さらにダニエル自身が夢を見ました。四頭の獣であり、一つ目は獅子のようなもの、二つ目は熊のようなもの、三つめは、四つの頭を持ち、四つの翼を持つ豹、そして四つ目が、十本の角を持ち、鉄の牙を持つ得体の知れない、獰猛な獣であります。その四つ目の十本の角の間から、さらに一本の小さな角が生えてきて、その三つの角を倒し、非常に大きくなり、大きな口を持ちます。人間の目も持っています。

この第四の獣についての解き明かしを天使が行います。「第四の獣は地に起こる第四の国。これは、ほかのすべての国と異なり、全土を食い尽くし、これを踏みつけ、かみ砕く。(23 節)」これがローマ帝国です。そしてその後、ローマが分解して、先ほどの粘土と鉄が混じり合っているのが、十本の角の状態、全世界が十に分かれて治めるとい時代が起こり、そこから荒らす忌むべきもの、すなわち反キリストが現れると言っています。

したがって今、この第四の獣の時代に皇帝アウグストが出てきたということでもあります。それは平和の秩序はあったかもしれませんが、武力で制圧するところの圧政でありました。「鉄はすべてのものを打ち砕いて粉々にするからです。その国は鉄が打ち砕くように、先の国々を粉々に打ち砕いてしまいます。(ダニエル 2:40)」これが、ローマ帝国の実体です。このような中にキリストが現れるように神が定めておられたのです。しかしその現れは、武力ではなく、実にへりくだった姿であり、しかしながらそのへりくだりは、武力をも凌駕する力を持っていたのです。

2 それで、人々はみな、登録のために、それぞれ自分の町に向かって行った。

アウグストの勅令に、人々はみな従いました。彼の覇権は、すべての家庭を動かしてしまうほど拡大していました。アウグストは、世界の超大国であるローマの最初の皇帝でした。このときから、「カエザルは主である。」と人々に呼ばせて、皇帝が「主」あるいは「神」と同じ身分に置かれるようになったのです。

3 ヨセフもガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。4 彼は、ダビデの家系であり血筋でもあったので、身重になっているいいなづけの妻マリヤもいっしょに登録するためであった。

ここで、超大国の皇帝アウグストの話から、その国の一住民であるヨセフの話に焦点が絞られています。ヨセフはナザレという評判の良くない町に住んでおり、先祖はベツレヘムという、これまた小さい町に住んでいました。ただ、ヨセフについて特別なことは、彼がダビデの子孫であったことです。

マリヤは、このとき妊娠していました。ナザレからベツレヘムまでは、130 キロぐらいあります。おそらく、マリヤを驢馬や騾馬にゆっくりとヨセフは進んでいったことでしょう。妊婦にとって、この長旅は非常に酷なことでありましたが、皇帝の勅令には逆らうことができません。そして、マリヤが「身重になっているいいなづけの妻」と呼ばれていますが、これはあってはならない表現です。婚約中だけれども妊娠しているのですから、それが発覚したらユダヤ人たちから石打ちにされます。彼らの立場は、社会一般よりも低かったことがわかります。

6 ところが、彼らがそこにいる間に、マリヤは月が満ちて、7 男子の初子を産んだ。それで布にくるんで、飼葉おけに寝かせた。宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。

マリヤは、家畜小屋の中で子を産みました。そこは、糞のにおいがして、とても非衛生的なところでした。そんなところで出産した理由が、「宿屋には場所がなかった。」とあります。この宿屋は、ホテルや旅館のようなものではなく、ただ雨風をしのぐために、覆いがされているような、おそらくは洞穴でした。イスラエル旅行に行った時に、ガイドの方から説明を受けたのは、神殿や他の建物を

造る時に、石切場があります。そこにできた洞穴を、貧民はそのまま自分たちの住居として使いました。そこにさえ、彼らの泊まる場所がなかったというのです。そして、同じく洞穴ですが家畜小屋として使っていたところに寝かせたのです。

パプテスマのヨハネの誕生とさえ、イエス様は卑しいお姿で生まれました。ヨハネは祭司の子どもであります、イエスの親は何でもない人です。ヨハネは、人々の喜びと楽しみの中で生まれましたが、イエスは、人々に追い返されるようにしてお生まれになりました。

しかし、これは人間側から見たらでの話です。神側からこの出来事を見ますと、ミカの預言があります。「ベツレヘム・エフラテよ。あなたはユダの氏族の中で最も小さいものだが、あなたのうちから、わたしのために、イスラエルの支配者になる者が出る。その出ることは、昔から、永遠の昔からの定めである。(5:2)」神は、マリヤの出産が近いことを知って、彼らがベツレヘムに行くように導かれたのです。皇帝アウグストを動かして、全世界の住民登録の勅令を出すようにされました。ヨセフとマリヤは、宿屋の主人さえも動かす力がなかったのですが、神は、皇帝アウグストを動かす力を働かせておられたのです。

ここです、私たちの主であり王であられる方は、人々の中でも卑しいとされる形で生まれ、また生きていかれますが、この世の支配者よりも強く生きられるのです。そのメシヤの姿を示す預言がイザヤ書にあります。「見よ。わたしのささえるわたしのしもべ、わたしの心の喜ぶわたしが選んだ者。わたしは彼の上にわたしの霊を授け、彼は国々に公義をもたらす。彼は叫ばず、声をあげず、ちまたにその声を聞かせない。彼はいたんだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともなく、まことをもって公義をもたらす。彼は衰えず、くじけない。ついには、地に公義を打ち立てる。島々も、そのおしえを待ち望む。(42:1-4)」私たちがへりくだり、王なるキリストに従うことによって、この全世界に対して高らかに勝利を宣言する光となりえるのです。

2B 証言 — 羊飼いの 8-20

1C 御使いの現われ 8-14

8さて、この土地に、羊飼いたちが、野宿で夜番をしながら羊の群れを見守っていた。

話は、ベツレヘムの土地にいる羊飼いのことに移っています。イエスの生きておられた時代において、羊飼いは、ダビデの生きていた時代にあったような尊敬はなくなっていた、と言われていきます。どちらかといえば、疑問視されるような評価しか受けなかったようです。当時は重税が課せられていました。ユダヤ教の十分の一税と神殿礼拝における神殿税、それだけでなく、ローマ帝国に対する税金がありました。こうした状況下で、宗教税は未払いにして、熱心なユダヤ教徒からは罪人という烙印を押されて、生きていた人々です。その彼らに、神はキリストの誕生をお知らせになったということです。マリヤがイエス様を身ごもった時に、賛美の歌をうたった通りです。「主は、御腕をもって力強いわざをなし、心の思いの高ぶっている者を追い散らし、権力ある者を王位から

引き降ろされます。低い者を高く引き上げ、飢えた者を良いもので満ち足らせ、富む者を何も持たせないで追い返されました。(ルカ 1:51-53)」

さらに神の目線では、ベツレヘムの羊飼いはとても尊い存在でした。ベツレヘムで飼われていた羊は、過越の祭りのために使われるものでした。その羊は、傷や欠陥がないものでなければいけなかったので、ベツレヘムという場所で、大切に育てられたのです。イエスは過越の小羊であります。過越の祭りでは、エルサレムで羊がほふられたように、イエスはエルサレムで十字架につけられました。そして、ベツレヘムで過越の子羊が生まれ育ったように、イエスはベツレヘムでお生まれになったのです。ですから、ベツレヘムの羊飼いたちに、イエスの誕生が知らされることは、とても大きな意味があったのです。

9 すると、主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が回りを照らしたので、彼らはひどく恐れた。

主の使いが、主の栄光をたずさえて羊飼いに現われました。これは、天国が、いきなり彼らの前に現われたようなものです。バプテスマのヨハネの父ザカリヤも、神殿の中でガブリエルが現れて恐怖に包まれました。マリヤも彼を見て、恐れました。天にある神の栄光は、罪あるものには恐怖に包まれる聖なるものです。けれども、それぞれの登場人物に対して天使は、「恐れることはない、良い知らせを伝えにきたのだ。」と言いました。

10 御使いは彼らに言った。「恐れることはありません。今、私はこの民、全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。」

恐れることなく、喜ぶことを御使いは知らせに来ました。この「喜びの知らせ」のギリシヤ語は、「福音」と同じであります。ここで、先ほど話したように、ルカは皇帝アウグストが持っている福音に対して、明確にこの方こそが喜ばしい知らせなのだ、と明らかにしたのです。私たちは、何を喜ばしい知らせとしているのでしょうか？世にある喜びでしょうか、富や権力、快樂にある喜びでしょうか？それともこのへりくだりの中にある、キリストの喜びでしょうか？

11 きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。

「ダビデの町」です、かつてダビデが生まれ育った町であり、ここにダビデの世継ぎの子メシヤが生まれます。そして、御使いが、「あなたがたのために」と、個人的に語っていることに気づいてください。救い主によって、神と人との間にあった隔たりは取り除かれ、人の罪と汚れはきよめられ、神に受け入れられる者となります。そして、この方は「救い主」であります。当時は、皇帝アウグストが救い主としてあがめられましたが、いいえ、この方こそが救い主なのです。そして「主」であります。この方こそが、私たちを支配する主です。私たちを罪から、またこの世から救われる主

だけでなく、私たちがひれ伏して、服従すべき主なる方です。これも皇帝の称号になっていましたから、それに対して明確に宣言しています。そして「キリスト」であります。神に油そそがれた者という意味です。ですから、この方は、世界の支配者アウグストスでさえも従わざるをえない、王の王、主の主であります。私たちと個人的に接してくださる方が、すべてを支配される方であることを知るのには、とても慰められることです。

12 あなたがたは、布にくるまって飼葉おけに寝ておられるみどりごを見つけます。これが、あなたがたのためのしるしです。

ユダヤ人にとって、「しるし」は重要でした。神が契約を結ばれる時にノアに対しては、虹がしるしでした。アブラハムに対しては割礼がしるしでした。そして、神はダビデに対して、預言者イザヤを通して、男の子、しかもその子が神の御子と呼ばれることがしるしであることが知られました(9:6-7)。大部分の人にとっては、これは受け入れがたいしるしであったでしょう。主でありキリストである方が、飼葉おけで寝ておられるとは、どんなに狂ったしても考えられないことです。でも、この羊飼いたちには、信じることができました。

13 すると、たちまち、その御使いといっしょに、多くの天の軍勢が現れて、神を賛美して言った。「いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人にあるように。」

御使いは、神に対しては栄光が、人に対しては平和があるように、と賛美しています。このみどりごに神の満ち満ちた姿が現われおり、この子を自分の救い主として受け入れる者には、平和が心におとずれます。なぜなら、神に敵対して、いずれさばかれる存在が、キリストの死によって、神との和解を持つことができるからです。そして、この「平和」という言葉も、パクス・ロマーナによってローマに使われていた言葉です。しかし、真の平和は神に栄光が与えられる時に与えられます。そして真の平和は、神の御心を行う時にそこに実現します。

2C 応答 15-20

次の羊飼いたちが、御使いのメッセージに応答します。15 御使いたちが彼らを離れて天に帰ったとき、羊飼いたちは互いに話し合った。「さあ、ベツレヘムに行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見て来よう。」16 そして急いで行って、マリヤとヨセフと、飼葉おけに寝ておられるみどりごとを捜し当てた。17 それを見たとき、羊飼いたちは、この幼子について告げられたことを知らせた。

彼らは、その与えられた神の啓示に信仰をもって応答しました。それで喜びに満ち溢れています。それから、期待して捜しました。そして、天からの啓示を興奮して伝えます。これが、良き訪れの性質です。「良い知らせを伝える者の足は山々の上にあつて、なんと美しいことよ。平和を告げ知らせ、幸いな良い知らせを伝え、救いを告げ知らせ、「あなたの神が王となる。」とシオンに言う

者の足は。(イザヤ 52:7)」

18 それを聞いた人たちはみな、羊飼いの話したことに驚いた。19 しかしマリヤは、これらのことをすべて心に納めて、思いを巡らしていた。

羊飼いの言ったことは人々に伝えられました。そして、1 章と 2 章には、「驚いた」という言葉が続きます。あまりにも不思議なことで、驚くのです。エリサベツが、生まれてきた男の子はヨハネという名にしなければいけないと言い、ザカリヤが「彼の名はヨハネ」と書いたので、人々はみな驚きました(1:63)。そしてここでは、イエス様の誕生のことで人々が驚いています。興味深いことに、同じルカが書いた使徒の働きでも、初めに聖霊降臨によって人々が外国の言葉をもって神を賛美しているのを見て、驚き呆れました。このように、神がなさることは不思議であり、人々に驚愕をもたらすものです。

しかし数多くの人々は驚いただけで、心には留められなかったのです。それに対し、ヨハネのときは、「聞いた人々はみな、それを心にとどめて(1:66)」とあります。たぶん、話したのが羊飼いということで、信じられなかったのでしょう。しかし、マリヤは、心に納めて、思いを巡らせていました。彼女はこのような霊的な事柄、天の啓示について思案する人でした。天使が彼女に現れた時も、「いったい何のあいさつかと考え込んだ。(1:29)」とあります。そして、これからも思い巡らす彼女の姿を見ます。私たちは、この世に生きていて、いったいこれは何のことかと分からなくなることがあります。けれども、神がこのことを通して何をなさっておられるのか、思い巡らす必要があります。そして、そのことを神は確かに明らかにしてくださいませ。

20 羊飼いたちは、見聞きしたことが、全部御使いの話のとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

事実、御使いの言ったとおりだったということで、神をあがめ、賛美しました。私たちも、ぜひこの体験をしたいです。神のみことばが確かにその通りになったことを喜び、賛美するのです。

3B 移行 — 御使いによる名 21

21 八日が満ちて幼子に割礼を施す日となり、幼子はイエスという名で呼ばれることになった。胎内に宿る前に御使いがつけた名である。

割礼は、ユダヤ人になることのしるしであります。これはとても大切な儀式とされ、八日目が安息日であっても、割礼を施すことが許されたほどです。そして、イエスという名前が与えられました。これは、「ヤハウエは救い。」と言う意味です。また、両親が、御使いに言われたように、名づけたことに気づいてください。彼らは、神に対し従順な人たちでした。

2A 幼子として 22-40

1B 従属 — モーセの律法 22-24

22 さて、モーセの律法による彼らのきよめの期間が満ちたとき、両親は幼子を主にささげるために、エルサレムへ連れて行った。23 それは、主の律法に、「母の胎を開く男子の初子は、すべて、主に聖別された者、と呼ばれなければならない。」と書いてあるとおりであった。24 また、主の律法に、「山ばとが一つがい、または、家ばとのひな二羽。と定められたことに従って犠牲をささげるためであった。」

二人は、モーセの律法を忠実に守っていました。神が、モーセを通して、イスラエルの民に与えられました。「きよめの期間」とありますが、母親が男子を出産したら 33 日間こもらなければならぬことが、レビ記に書かれています(12:1-8)。その後に、その子を主の御前にささげなければいけません、特に、最初に生まれてきた男子は、主に聖別された者となることが出エジプト記に書かれています(13:2)。そして、彼らは、山ばとか、家ばとのひなをいけにえとしてささげたようですが、これは、羊を買う余裕のない人たちがささげることができるように、律法の中で定められています(レビ 12:8)。このことから、ヨセフとマリヤは貧しかったことが伺えます。

このように、ヨセフとマリヤは、ローマ帝国の勅令に従っただけでなく、モーセの律法にも従っていました。社会的に身分が低くだけではなく、神の徹前にへりくだる人たちでした。イエスは、そうした両親からお生まれになることによって、ご自分を低くし、人々に届こうとされたのです。イエスは、「暗黒と死の影にすわる者たちを照らす日の出」とザカリヤから呼ばれました。すべての人を照らすために、すべての人のしもべの立場を取られたのです。

2B 証言 — 神の人 25-38

これまで、バプテスマのヨハネをみごもること、そしてイエス様をみごもること、そしてヨハネの誕生、それからイエスの誕生と続きました。けれどもルカは、続けてイエス様の誕生後の姿を描いていきます。ヨハネはあくまでも、旧約の預言からメシヤご自身につなげる先駆者であります。主役はイエス様です。そして、イエス様の誕生に天からの啓示があったことを告げる羊飼いの証人がいましたが、今度も同じです。聖霊によって、この方がイスラエルを救うことを知らされた老人二人が預言をします。

1C 聖霊に満たされた人 25-35

25 そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい、敬虔な人で、イスラエルの慰められることを待ち望んでいた。聖霊が彼の上にとどまっておられた。26 また、主のキリストを見るまでは、決して死なないと、聖霊のお告げを受けていた。

ひとり目の証人は、シメオンです。彼は、正しく敬虔な人でした。なぜなら、イスラエルが慰められることを待ち望んでいたからです。「慰めよ。慰めよ。わたしの民を。」とあなたがたの神は仰せ

られる。「エルサレムに優しく語りかけよ。これに呼びかけよ。その労苦は終わり、その咎は償われた。そのすべての罪に引き替え、二倍のものを主の手から受けたと。」(イザヤ 40:1-2)しかし、多くのユダヤ人は、慰めよりも力を求めていました。ローマ帝国から独立したい、自分たちの国を持ちたい、という政治的な解放の欲求が強かったのです。しかし、もし自分が高ぶったままで政治的に解放されたとしても、本当の自由ではありません。一人一人が神の御前にへりくだり、主に立ち返り、心のいやしをいただくことによって、初めてイスラエルの救いは完全なものとなります。その、本当の意味での救いを求めていたのがシメオンです。

それが出来たのは、彼の上に、聖霊がとどまっておられたからです。この「彼の上」という言葉は、使徒の働き 1 章 8 節にも出てきます。「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。」聖霊が接近してくださり、親しく臨んでくださっています。そして、彼は主に対して真剣に祈り求めていた人であったのでしょう。それが、聖霊が上にとどまっていたことを意味しています。その中で、主のキリストを見るまでは決して死なないというお告げを聖霊ご自身から受けていました。

27 彼が御霊に感じて宮に入ると、幼子イエスを連れた両親が、その子のために律法の慣習を守るために、はいつて来た。

彼は御霊に感じました。聖霊が彼の上であり、聖霊のお告げを聞いて、今、ここでは御霊に感じました。彼は、御霊の人でした。でも、祭司でも何でもありません。普通の人でした。神は、牧師や伝道者のような立場にいる人だけでなく、どんな人をも、聖霊によって満たすことがおできになります。

28 すると、シメオンは幼子を腕に抱き、神をほめたたえて言った。「主よ。今こそあなたは、あなたのしもべを、みことばどおり、安らかに去らせてくださいます。私の目があなたの御救いを見たからです。」

彼は、幼子イエスご自身を、「御救い」と呼んでいます。なぜなら、ことばや幻などでご自分を示された神は、今、人間の姿でご自分を示されたからです。救いを聞くだけでなく、さわって、見ることができました。

29 「御救いはあなたが万民の前に備えられたもので、異邦人を照らす啓示の光、御民イスラエルの光栄です。」30 それで、父と母は、幼子についていろいろ語られる事に驚いた。

これは、驚くべき発言です。ユダヤ人にとって、救い主は、あくまでもイスラエルを救う方でした。異邦人は全く考慮に入れられていませんでした。しかし、御救いが異邦人の光としておとずれると、シメオンは言っているのです。しかしこれは、預言者イザヤも御霊によって告げていたことです。

「ただ、あなたがわたしのしもべとなって、ヤコブの諸部族を立たせ、イスラエルのとどめられている者たちを帰らせるだけではない。わたしはあなたを諸国の民の光とし、地の果てにまでわたしの救いをもたらす者とする。(49:6)」けれども、ユダヤ人にはそれが見えていませんでした。あくまでもイスラエルに対するキリストだったのです。しかし、神のご計画はキリストが捨てられる、イスラエルによって捨てられるというものです。そのことを、次にシメオンがマリヤに話します。そして諸国の民にあって光となります。そして、異邦人の救いが完成した時にイスラエルの光栄となります。つまり、イスラエルも再臨のキリストによって救われるのです。

両親は、この壮大な神のご計画を告げられた両親は、先ほど羊飼いが告げた言葉で驚いた人々と同じように驚いています。しかし、マリヤに対してさらなる預言をシメオンは行います。

34 また、シメオンは両親を祝福し、母マリヤに言った。「ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの者が倒れ、また、立ち上がるために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。35 剣があなたの心さえも刺し貫くでしょう。それは多くの人の心の思いが現われるからです。」

イエスが異邦人にとって光となる一方で、肝心なイスラエル人の多くが彼に反対します。イエス様は、ナザレの会堂において、異邦人が神の救いを受けたことを旧約聖書から話されました。例えば、シリア人ナアマンが、らい病の清めを受けたというものです。それを聞いていたユダヤ人は、非常に怒ります。神がなさる恵みに腹を立てたのです。そしてマリヤ自身は、イエスが多くの人の憎しみを受けるのを見るようになります。その究極が、あの十字架刑でした。マリヤは、その場に立ち会っています。このように、イエスは多くの人から拒まれます。

2C 女預言者 36-38

36 また、アセル族のパヌエルの娘で女預言者のアンナという人がいた。この人は非常に年をとっていた。処女の時代のあと七年間、夫とともに住み、37 その後やもめになり、八十四歳になっていた。そして宮を離れず、夜も昼も、断食と祈りをもって神に仕えていた。38 ちょうどこのとき、彼女もそこにおいて、神に感謝をささげ、そして、エルサレムの贖いを待ち望んでいるすべての人々に、この幼子のことを語った。

シメオンの次は、アンナという女性が幼子イエスのことを証言しました。彼女はシメオンと違って、宮で仕えている預言者でした。けれども女性です。ユダヤ人社会は、異邦人ほどひどくはなかったけれども、男尊女卑でした。けれども、その女性がイエスのことを語っている事実は、福音が女性にも行き届くことを示しています。パウロは、「男も女も、…キリストにあってひとつだからです。」と言いました。そして、羊飼いと同じように、エルサレムの贖いを待ち望んでいる人々に、贖い主が来られたことを周囲に伝えました。

こうして、聖霊に満たされた人と、女預言者によって、イエスのことが証しされました。イエスは

親に抱かれる以外に、何もすることのできない幼子でした。しかし、神の御子としての力は、皇帝を動かす、御使いを動かす、羊飼いを動かす、そして、ここで、シメオンとアンナを動かしています。

3B 移行 — 神の恵みによる成長 39-40

39 さて、彼らは主の律法による定めをすべて果たしたので、ガリラヤの自分たちの町ナザレに帰った。幼子は成長し、強くなり、知恵に満ちていった。神の恵みがある上であつた。

イエスは神の御子でありながらも、人として成長されました。他の子どもと同じように、言葉をおぼえたりしていたに違いありません。でも、多くの方は、神の御子ならば学習をする必要はないのではないかと疑問を持つでしょう。でも、逆に、小さいときからもし何の学習もする必要がなかったら、イエスは子どもたちに届くことができるでしょうか。子どもたちが持っている悩みや苦しみを、どのようにして理解することができるのでしょうか。イエスは、子どもたちの救い主となるためにも、子どもとして成長されたのです。イエスは、完全な神であられると同時に、完全に人でした。

3A 少年として 41-52

そして、この「知恵に満ちていった、神の恵みがある上であつた」ということを証する出来事が起こります。少年イエスを描いているのは、四つの福音書の中でコルナドだけです。

1B 従属 — 祭りの慣習 41-45

41 さて、イエスの両親は、過越の祭りには毎年エルサレムに行った。42 イエスが十二歳になられたときにも、両親は祭りの慣習に従って都に上り、43 祭りの期間をすごしてから、帰路についたが、少年イエスはエルサレムにとどまっていた。両親はそれに気づかなかった。

イエスの両親は、モーセの律法にしたがって、過越の祭りにも来ました。ユダヤ人の男性の成人は、三つの祭りのためエルサレムに行かなければいけません。三つの祭りとは、過越の祭り、五旬節、仮庵の祭りです。ヨセフは、この命令に自分だけでなく、家族ぐるみで従ったようです。

そして、イエスが十二歳の時であるとしています。ユダヤ人の中では、十三歳になるとミツバという儀式を男の子に行います。この儀式を経ると成人になります。その直前の出来事でありました。

44 イエスが一行の中にいるものと思って、一日の道のりを行った。それから、親族や知人の中を捜し回ったが、45 見つからなかったため、イエスを捜しながら、エルサレムにまで引き返した。

イエスがはぐれてしまいました。十二歳と言ったら、両親にぴったりくっついていなくて、あつちやこつちや、いろんなところをうろろろしてるような時期であります。両親は、親族や知人の人たちと大ぜいで帰っていたので、イエスもいっしょに付いてきていると思ったのでしょうか。ところがいな

いので、彼らは非常に心配しました。

2B 証言 — イエスご自身 46-50

46 そしてようやく 三日の後に、イエスが宮で教師たちの真中にすわって、話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。47 聞いていた人々はみな、イエスの知恵と答えに驚いていた。

イエスは、教師たちのところでいっしょにすわって、その教えを聞いたり、質問をされました。ラビが弟子に教えるとき、このように質疑応答で話が進んでいきました。そして先ほど、イエスが「知恵に満ちていった」と書かれていましたが、今は、その知恵が教師たちを驚かせています。少年としての知識は限られていましたが、その知識をどのように適用させるか、つまり知恵に満たされていたのです。

47 両親は彼を見て驚き、母は言った。「まあ、あなたはなぜ私たちにこんなことをしたのです。見なさい。父上も私も、心配してあなたを捜し回っていたのです。」

律法の教師たちも驚いていますが、両親も驚いています。イエス様の知恵に前者は驚きましたが、なぜこんなところに留まっていたのかという驚きがあります。母マリヤは気分を害しました。母親として、気分を害しました。しかし、次のイエスの発言を見てください。

48 するとイエスは両親に言われた。「どうしてわたしをお捜しになるのですか。わたしが必ず自分の父の家にいることを、ご存じなかったのですか。」

ここの「家」は、仕事と訳すことができます。両親に向かって、「わたしは、わたしの父の仕事をしている。」と言われたのです。これは、まぎれもなく、ご自分が神のひとり子であることを証言しているに他なりません。マリヤは、母親としてイエスを見てしまいましたが、今イエスは、御子としての仕事を始められているのです。幼子イエスには、他の人々の証言が必要でしたが、もう立派に言葉の話せるイエスは、そんな必要はありません。ご自分でご自分のことを証されたのです。

49 しかし両親には、イエスの話されたことばの意味がわからなかった。

両親にとって、イエスを子どもに持つことは大きな試練でした。子どもは自分の子どもであると考えて当然なのですが、そう考えるとイエスの本当の姿が見えないのです。後で、ナザレの人々は、「あれはヨセフの子ではないか。」と言って、イエスがキリストであることを認めることができませんでした。それだけ、イエスの成長している姿は、あまりにも他の人間と変わらない普通の姿だったのです。

これから、両親だけでなく、群衆も、弟子たちでさえが、イエス様の不可解な言葉に当惑していき

ます。主が語られているのは霊に属することなのですが、日常生活を歩んでいる者にとっては、肉に属することでしか悟らないからです。しかし、シメオンのように聖霊に告げられる時、その神のご計画の全貌を見ることができるのです。私たちが、いかに御霊に属することを語り、キリストの思いを知ることができるのか、それは御霊による悟りにかかっています。

3B 移行 — 神と人の愛による成長 51-52

51 それからイエスは、いっしょに下って行かれ、ナザレに帰って、両親に仕えられた。母はこれらのことをみな、心に留めておいた。

この「仕えられた」という言葉が、ものすごく大きな意味を持ちます。この両親は、社会的にも、経済的にも身分の低い人たちでした。また、モーセの律法やその慣習を守る、神の御前にもへりくだる人たちでした。その両親に仕えることは、自分を本当に低い立場に置くことです。むろん、神が人となること自体に、ものすごいへりくだりがあるのですが、人間の世界の中でも低い立場を取られました。神のひとり子である意識を抱きながら、人々に仕える姿を取られたのです。パウロは言いました。「キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のありかたを捨てることができないと考えるので、ご自分を無にし、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質を持って現れ、自分を卑しくされました。(ピリピ 2:6-8)」

彼女は、再び心に留めました。マリヤは、母親としてイエスを育てながら、主のはしめとしてイエスのことを考えました。イエスは、いったいどのような方であるのか。キリストであり、主である方は、今は、わたしの父の仕事をしていると言われて、エルサレムにとどまっておられた。この方は、次に何をされるのだろうか、と考えていたのでしょうか。彼女は、肉のつながりと霊のつながりの狭間に立ちながら、深く思い巡らしたに違いありません。

この彼女の姿は、ルカが書いた使徒の働き 1 章で明らかになります。彼女は、屋上の中で他の 120 名ほどの弟子たちと心を合わせて祈っている時に、共に祈っていた一人として登場します(1:14)。彼女はイエスを自分の息子ではなく、イエスを自分の主として祈っていたのです。なんと大きな葛藤を神から使命として与えられたことでしょうか！けれども、これが私たちの人生にも神は与えておられます。肉として生きている私たちです。しかし、神は私たちにどうしても理解できない出来事を与えられます。そしてその肉から切り離された、御霊による生活を送るように導いておられます。

52 イエスはますます知恵が進み、背たけも大きくなり、神と人ともに愛された。

イエスは成人へと成長されていきました。思春期も経験されました。こうして、イエスご自身、私たちと同じ道を通られたのです。こうして、イエスは、ご自分を卑しくされることによって、人の弱さを学ばれたのです。知識がないとはどういうことか。親に従うとは、どういうことか。国の法律に従

い、また、神のおきてを守るとはどういうことか。イエスは、これらすべてを知っておられます。このイエスが、私たちの「不思議な助言者」です。カウンセラーです。私たちを慰め、励まし、導びかれます。そして私たちのために、全能の力を働かせて、すばらしい事をしてくださいます。力強いけれど、あわれみに富んだ方です。どうぞ、イエスのもとに行って、休み、くびきを負い、そして学んでください。